

## オリンピック柔道競技の競技分析

—1992年～2000年大会を対象として—

坂本道人\*, 菅波盛雄\*\*, 中村勇\*\*\*, 林弘典\*\*\*\*  
久保田浩史\*\*\*\*\*, 石井孝法\*\*\*\*\*, 小俣 幸嗣\*

Analysis of olympic judo  
A trend of the judo event 1992 to 2000

Michito SAKAMOTO \*, Morio SUGANAMI \*\*, Isamu NAKAMURA \*\*\*  
Hironori HAYASHI \*\*\*\*, Hiroshi KUBOTA \*\*\*\*\*, Takanori ISHII \*\*\*\*\*,  
Koji KOMATA \*

The purpose of this study was to clarify whether world judo became more active due to the recent rule changes by analyzing the judo events of the Olympic Games in 1992, 1996, and 2000. Inquiry topics were : (1) winning points, (2) match duration, and (3) the number of infractions.

Major findings are ; (1) increase of "ippon gachi", decreases of "yusei gachi" and "hantei" of men through the three games; (2) increase of infractions, and decrease of [yusei gachi] of women through the games, and; (3) increase in the number of infractions of both men and women, which means referees are actively giving penalties.

The results of the study indicate that men's judo has become more active but women's judo has not.

---

\* 筑波大学体育センター  
\*\* 順天堂大学  
\*\*\* 鹿屋体育大学  
\*\*\*\* 明治鍼灸大学  
\*\*\*\*\* 水戸葵陵高校  
\*\*\*\*\* 筑波大学大学院体育研究科

## 1. 緒言

柔道は、ヨーロッパにおいては、「見るスポーツ」として定着してきている。カラー柔道衣導入問題においてもそうであったが、現在の国際柔道はランキングシステム<sup>注1</sup>、賞金大会などヨーロッパの影響が色濃く出てきている。これらの様々な施策は、観衆にとってわかりやすく、おもしろく、興奮度の高い試合を行っていくためのものである。それに必要な要素は、やはり「一本」であろう。

投技、固技のどちらにおいても「一本勝ち」というはっきりした形で勝負をつけることが「見るスポーツ」としても重要である。

バルセロナ大会(1992年)では、技を掛けては倒れ込んだり罰則を利用した戦術柔道の傾向が指摘されている<sup>21)</sup>。また、誤審や判定基準における解釈の不明瞭さが問題視されている<sup>3)13)21)</sup>。

これらをうけて国際柔道連盟(以下IJF)は、より攻撃的な柔道を奨励するため、積極的でないことに該当する禁止事項を「消極的

柔道」<sup>注2</sup>として、罰則に位置づけた<sup>4)6)16)</sup>。

そこで、本研究では積極的柔道推奨のためのルール改正(表1参照)が、実際の試合内容にどのように反映されているかを検討した。

## 2. 先行研究

菅波<sup>15)</sup>らは、嘉納治五郎杯国際大会(1986年)では「一本勝ち」で決まった試合が50%であったと報告している。

矢野<sup>22)</sup>らは、柔道衣に関する規定改正による競技内容への影響を比較検討している。その結果、柔道衣サイズが大型化したことにより「組み合っている時間」、「1分間あたりの施技数」は増加したが、投げ技でのポイント取得数などに変化はなかったと報告している。

高橋<sup>18)</sup>らは、ルール改正により、場外際の「手技」、「足技」の施技、「固技」によるポイント取得数の増加がみられたと報告している。

中村<sup>7)</sup>らは、世界柔道選手権大会(1997年)において、罰則による勝敗決定については、

表1 ルールの変遷

年	大会(開催地)	主な改正点
		ルールの改正
1989	世界選手権(バオグラード)	積極的戦意に欠ける場合教育的指導がなくなり1回目から指導になった
		消極的柔道の罰則導入
		偽装的攻撃の文章化
		柔道衣サイズの大形化
		試合者の両足が赤畳みに5秒間あったら「指導」
1990		
1991	世界選手権(バルセロナ)	
1992	オリンピック(バルセロナ)	
1993	世界選手権(ハミルトン)	オリンピック出場資格の導入
1994		場外に出る・出すは「警告→注意」 場内外の基準の変更
1995	世界選手権(千葉)	
1996	オリンピック(アトランタ)	
1997	世界選手権(パリ)	消極的柔道の罰則強化
		抑込時間の短縮 (一本:25秒,技あり:24-20,有効:19-15,効果:14-10)
1998		「取り組まない」行為への罰則導入
		ヒストルグリフの禁止 厚い柔道衣の禁止
1999	世界選手権(バーミンガム)	
2000	オリンピック(シドニー)	

©IJFのルール改正は、一つとして試合場内(特に赤畳みの内側)試合を行うこと、もう一つは、積極的に試合を行うこと等に配慮されていると考えることができる。

全体の12.9%であったと報告している。

中村<sup>8)</sup>らは、世界選手権大会(1995年、1997年、1999年)の勝利ポイントと勝利ポイント獲得技についての検討を行っている。「一本勝ち」はいずれの大会でも50%を上回り大会ごとにその割合は増加していたと報告している。

このように世界選手権大会や国際大会の競技分析は過去にも行われている。しかし、競技傾向とルール改正を絡めた立場から分析した論文は稀少であり、オリンピック大会を対象とした論文は見受けられない。

### 3. 用語の定義

本研究で用いる主な用語の定義を次のように定める。

「積極的柔道」(dynamic judo)は、旗判定、罰則によらず、投技、固技の技術によって勝敗が決着する柔道とした。日本では「一本」を取る柔道としている。

「勝利決定ポイント」は、「一本」、「技あり」、「有効」、「効果」、「警告」など最終的な勝敗を決定した得点とした。「試合時間」は、試合開始から勝敗が決定するまでの時間とした。「総罰則」は、試合中に審判員によって宣告された全ての罰則とした。

### 4. 研究方法

対象とした試合は、バルセロナ大会(1992年)、アトランタ大会(1996年)、シドニー大会(2000年)の柔道競技の男女全試合中、バルセロナ大会581試合、アトランタ大会523試合、シドニー大会532試合の計1636試合である。これら3大会のIJF公式記録及び会場で撮影したビデオテープを用い、勝利決定ポイント、勝利決定ポイント獲得内容など競技内容について分析を行った。

ビデオテープについては、全日本柔道連盟強化委員会科学研究部が会場で撮影したビデオテープを用いた。なお、その中には試合に

おける選手及び審判員の全動作が撮影されている。

本研究においては、勝利決定ポイント、試合時間、総罰則数を分析項目とした。

勝利決定ポイント、試合時間の分析には公式記録を用い、総罰則数においては、ビデオテープを用いた。総罰則数については、3大会、男女における均等な分析を行うため、各階級ベスト16以上、敗者復活最終戦、3位決定戦の計19試合が最も大きな分析範囲であったため、これを対象とした。上記の分析項目を男女別に分けて分析した。

勝利決定ポイントについては、公式記録に記録されている勝利決定獲得ポイントを抽出し分析した。その際、「一本勝ち」、「優勢勝ち」、罰則による勝利、旗判定による勝利の項目に分けた。「一本勝ち」は、「一本勝ち」、「総合勝ち」、「合せ技」を含めた。「優勢勝ち」は、「技あり」、「有効」、「効果」を含めた。罰則による勝利は、「警告」、「注意」、「指導」、「反則負け」を含めた。旗判定による勝利は、旗判定による決着のみとした。

試合時間については、公式記録に記録されている試合時間を抽出し、1分単位で分類した。

総罰則数については、罰則を「積極的柔道」、「その他」の2つの大きな項目に分け、さらにその中で細かい禁止事項を集計した。

また、本研究では、禁止事項の1項目である「積極的戦意の欠如」と「積極的柔道」についての罰則は、試合において積極性を求めるという意味で同一であると考え、同一項とした。

統計については、試合時間、勝利決定ポイント、罰則による勝利などの分析項目との関係を、 $\chi^2$ 検定を用いて検討した。さらに5%水準の有意差が認められた場合、期待値と実際の頻度の差を検討する残差分析を行った。

## 5. 結果および考察

### 5.1 勝利決定ポイント

#### 5.1.1 「一本勝ち」による勝利

男子は、「一本勝ち」による決定率がバルセロナ大会217試合(62%)とシドニー大会223試合(71.7%)に有意な増加傾向がみられた。

女子は、バルセロナ大会が100試合(44.1%)、アトランタ大会が102試合(47.9%)、シドニー大会が110試合(50.2%)と「一本勝ち」による決定率も低く、有意な増加傾向をみることができなかった。(図1、表2参照)

男子における増加の要因の一つには、「消極的柔道」に対する罰則の強化が考えられ

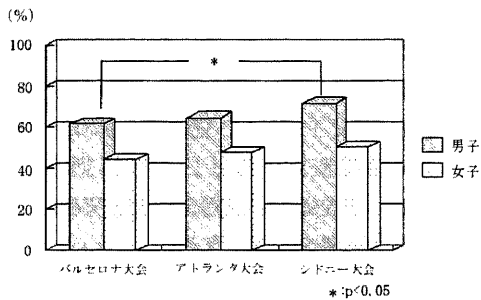


図1 「一本勝ち」の推移

表2 勝利ポイント

男子				
ポイント\大会	バルセロナ大会	アトランタ大会	シドニー大会	計
一本勝ち	*217 (62.0) ↓	201 (64.8)	*223 (71.7) ↑	641 (66.0)
優勢勝ち	*75 (21.4) ↑	52 (16.8)	*40 (12.9) ↓	167 (17.2)
罰則	*25 (7.1) ↓	40 (12.9) ↑	30 (9.6)	95 (9.8)
判定	*33 (9.4) ↑	17 (5.5)	18 (5.8)	68 (7.0)
計	350 (100)	310 (100)	311 (100)	971 (100)
棄権勝ち	1	1	1	3

女子				
ポイント\大会	バルセロナ大会	アトランタ大会	シドニー大会	計
一本勝ち	100 (44.1)	102 (47.9)	110 (50.2)	312 (47.3)
優勢勝ち	*86 (37.9) ↑	63 (29.6)	*49 (22.4) ↓	198 (30.0)
罰則	*8 (3.5) ↓	24 (11.3)	*29 (13.2) ↑	61 (9.3)
判定	33 (14.5)	24 (11.3)	31 (14.2)	88 (13.4)
計	227 (100)	213 (100)	219 (100)	659 (100)
棄権勝ち	3	0	1	4

↑:有意に大, ↓:有意に小, \*:p<0.05

る<sup>12)17)</sup>。組まない、技を掛けない行為に対して罰則が与えられるようになった結果である。また、「偽装的攻撃」に対しても厳しくなった<sup>16)</sup>。これらの事情から、お互いに組み合うようになり、攻防が活発化したことで「一本勝ち」の増加につながったものと考えられる<sup>13)18)</sup>。

他の要因としては、IJF審判委員らが指摘する「一本」「技あり」など審判員の技評価基準の甘さ<sup>1)2)5)19)</sup>もあげられる。

#### 5.1.2 「優勢勝ち」による勝利

男子は、バルセロナ大会75試合(21.4%)、アトランタ大会52(16.8%)、シドニー大会40(12.9%)と減少傾向がみられた。女子では、バルセロナ大会86試合(37.9%)、アトランタ大会63試合(29.6%)、シドニー大会49試合(22.4%)と減少傾向にあった。(表2参照)

男子は「一本勝ち」「優勢勝ち」など技術により決定した試合が、3大会ともに勝利決定ポイントの80~83%を占めていた。このうち、「一本勝ち」が増え「優勢勝ち」が減少していることから、本来「技あり」などと判断されていた技が上位の「一本」に評価された結果とも推察される。

女子は、男子のような「一本勝ち」の増加はみられなかった。女子は攻撃が促されても対応しきれず、さらに「一本」と認められる技も出現しにくい状況が推察される。

### 5.1.3 罰則による勝利

男子はバルセロナ大会25試合(7.1%)からアトランタ大会40試合(12.9%)へと有意に増えており、女子においては、バルセロナ大会8試合(3.5%)からシドニー大会29試合(13.2%)と増加傾向がみられた。(表2参照)

男子における増加の要因は、アトランタ大会での審判員が消極的柔道に厳しすぎたことや罰則重視の審判傾向が強かったことがあげられる<sup>1)19)</sup>。

女子の増加傾向の要因として、女性特有の身体的特性があげられる。女性は、一般に指摘されるように男性と比較して筋量が少なく柔軟性に富んでおり、技に入っても「受け」が柔らかいため、投げきることが難しいといわれている<sup>14)</sup>。このことから、女性は組み合った状態から相手を崩したり、強引に技に入ったりすることが容易でなく、技に入っても「受け」が柔らかいため、男子選手のような剛体が衝突するという状態が起こりにくいと思

われる。そのような攻撃防御が審判員に罰則適用を促す結果になったと推察される。

### 5.1.4 旗「判定」による勝利

男子は、バルセロナ大会で有意に高く、他の2大会で減少している。女子は、有意な変化はみられなかった。(表2参照)

男子の減少傾向は、「一本勝ち」の増加や、罰則の強化、判定基準の甘さが要因として考えられる。「判定」による勝利が減少することは、ポイントにより勝敗が決する試合が増えているということである。すなわち、見ている者にとっても明快な決着になってきているということがいえる。

## 5.2 試合時間

男子は、試合開始後2～3分、3～4分、つまり中盤から後半にかけての勝敗の決定率が増加傾向していた。女子については、大きな変化はみられなかった。(表3参照)

男子の増加については、「消極的柔道」に対する罰則を強化したことが要因として考えられる。バルセロナ大会の頃には、技を掛けては倒れ込む「偽装的攻撃」の柔道が罰則としてではなく、攻撃として判定の判断材料になっ

表3 試合時間

男子				
分/大会	バルセロナ大会	アトランタ大会	シドニー大会	計
0～1	67 (19.1%)	47 (15.1%)	49 (15.7%)	163 (16.7%)
1～2	51 (14.5%)	53 (17.0%)	47 (15.1%)	151 (15.5%)
2～3	49 (14.0%)	47 (15.1%)	56 (17.9%)	152 (15.6%)
3～4	*28 (8.0%) ↓	40 (12.9%)	*47 (15.1%) ↑	115 (11.8%)
4～5	25 (7.1%)	22 (7.1%)	33 (10.6%)	80 (8.2%)
5	*131 (37.3%) ↑	102 (32.8%)	*80 (25.6%) ↓	313 (32.1%)
計	351 (100%)	311 (100%)	312 (100%)	974 (100%)

女子				
分/大会	バルセロナ大会	アトランタ大会	シドニー大会	計
0～1	28 (12.2%)	18 (8.5%)	34 (15.5%)	80 (12.1%)
1～2	27 (11.7%)	22 (10.3%)	19 (8.6%)	68 (10.3%)
2～3	27 (11.7%)	30 (14.1%)	23 (10.5%)	80 (12.1%)
3～4	22 (9.6%)	33 (15.5%)	34 (15.5%)	89 (13.4%)
4	126 (54.8%)	110 (51.6%)	110 (50.0%)	346 (52.2%)
計	230 (100%)	213 (100%)	220 (100%)	663 (100%)

↑:有意に大, ↓:有意に小, \*:p<0.05

ていたことが報告されている<sup>21)</sup>。IJFがこの状況を打破しようと考え、罰則を強化したことで、お互いに攻撃するようになり、「偽装的攻撃」も戦術として利用できなくなった<sup>16)</sup>。この結果、攻撃し合う必要性が強くなり、中盤から後半にかけての決定率が増加したものと推察される。

### 5.3 総罰則数

男女とも3大会を通じて、総罰則数は経年的に増加している。また、それぞれの大会に

おいて与えられた罰則のうち、「消極的柔道」に関するものが90%以上を占めた。(表4参照)

さらに、このうち「積極的戦意の欠如」が66～78%であった。この罰則は、攻撃防御の動きが約25秒間行われないうちに、試合者に施技を促すものである。

「積極的戦意の欠如」についてみると、男子は、バルセロナ大会の104個からアトランタ大会159個と増加し、シドニー大会130個と減少を示した。女子は、バルセロナ大会55

表4 総罰則数

		男子			
		数 (%)	数 (%)	数 (%)	数 (%)
罰則\大会		バルセロナ大会	アトランタ大会	シドニー大会	計
消極的柔道	積極的戦意の欠如	104 (73.8)	159 (78.3)	130 (66.3)	393 (72.8)
	故意に取り組まない	2 (1.4)	4 (2.0)	3 (1.5)	9 (1.7)
	極端な防御姿勢	9 (6.4)	4 (2.0)	23 (11.7)	36 (6.7)
	偽装的攻撃	7 (5.0)	25 (12.3)	14 (7.1)	46 (8.5)
	危険地帯 (5秒ルール)	5 (3.5)	0 (0.0)	2 (1.0)	7 (1.3)
	袖口を握る	2 (1.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (0.4)
	指を組み合わす	2 (1.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (0.4)
	遅延行為	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.5)	1 (0.2)
	ピストルグリップ	0 (0.0)	0 (0.0)	7 (3.6)	7 (1.3)
小計		131 (92.9)	192 (94.6)	180 (91.8)	503 (93.1)
その他	下穿 (ズボン) をにぎる	1 (0.7)	1 (0.5)	4 (2.0)	6 (1.1)
	非標準的組み方	7 (5.0)	5 (2.5)	6 (3.1)	18 (3.3)
	場外 (出る/出す)	2 (1.4)	5 (2.5)	5 (2.6)	12 (2.2)
	ダイビング	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.5)	1 (0.2)
	小計	10 (7.1)	11 (5.4)	16 (8.2)	37 (6.9)
合計		141 (100)	203 (100)	196 (100)	540 (100)

		女子			
		数 (%)	数 (%)	数 (%)	数 (%)
罰則\大会		バルセロナ大会	アトランタ大会	シドニー大会	計
消極的柔道	積極的戦意の欠如	55 (77.5)	75 (68.2)	103 (68.2)	233 (70.2)
	故意に取り組まない	1 (1.4)	3 (2.7)	16 (10.6)	20 (6.0)
	極端な防御姿勢	5 (7.0)	4 (3.6)	13 (8.6)	22 (2.2)
	偽装的攻撃	8 (11.3)	21 (19.1)	10 (6.6)	39 (11.7)
	指を組み合わす	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (1.3)	2 (0.6)
小計		69 (97.2)	103 (93.6)	144 (95.4)	316 (95.2)
その他	下穿 (ズボン) をにぎる	0 (0.0)	1 (0.9)	2 (1.3)	3 (0.9)
	非標準的組み方	2 (2.8)	0 (0.0)	3 (2.0)	5 (1.5)
	場外 (出る/出す)	0 (0.0)	4 (3.6)	1 (0.7)	5 (1.5)
	相手の顎を絞める	0 (0.0)	1 (0.9)	0 (0.0)	1 (0.3)
	ダイビング	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.7)	1 (0.3)
	蟹挟	0 (0.0)	1 (0.9)	0 (0.0)	1 (0.3)
小計		2 (2.8)	7 (6.4)	7 (4.6)	16 (4.8)
合計		71 (100)	110 (100)	151 (100)	332 (100)

個、アトランタ大会75個、シドニー大会103個と連続して増加傾向がみられた。

1996年から、IJF審判委員会はダイナミック柔道を目指すため、消極的な試合には罰則をもって対処し、試合を活性化する旨の決定をしており、これがその後の罰則強化につながっていることは間違いない<sup>10)</sup>。

しかし、アトランタ大会の急激な罰則増加の状況は、必ずしもIJFの意図したのではなく、審判員が消極的柔道に厳しすぎたことや罰則重視の審判傾向が報告されている<sup>11)10)</sup>。

また、「偽装的攻撃」も男女において、「積極的戦意の欠如」と同じ推移の傾向を示したが、IJF審判委員会が背負投だけでなくすべての技に適用するという解釈を示したためと考えられる<sup>20)</sup>。

## 6. まとめ

IJFの行ったルール改正が、男女別の競技傾向をもたらした。

男子は、「一本勝ち」の増加や罰則による勝利の減少から、競技がIJFの意図する積極的柔道の方向に進んでいるといえる。

女子は、「一本勝ち」の増加はみられず、「優勢勝ち」も減少傾向にあった。さらに、罰則による勝利は増加傾向にあった。すなわち、女子は、罰則適用を強化することで技術ポイントによる勝利決定率を上げることは難しいといえる。

つまり、積極化に関していえば、同じルールの運用であっても男女では同様の試合傾向が期待できないということである。

### 注1

参加資格制度(通称・ランキングシステム)

参加資格制度は、IJFがアトランタ大会からIOCの方針を取り入れたもので、出場選手の人数に制限を加え世界選手権や各種国際大会で好成績をあげた選手の国にポイント、出場権を与えていくシステムである。

### 注2

「消極的柔道」(negative judo)とは、IJFのルールに規定されている9項目の禁止事項の総称である。以下の行為が「指導」の罰則に該当する。

- (1) 試合において、勝負を決しようとしなため、故意に取り組まないこと。
- (2) 立ち姿勢において、極端な防御姿勢をとること。(通常5秒を超えて)
- (3) 攻撃しているような印象を与えるが、明らかに相手を投げける意思のない攻撃を行うこと。(偽装的攻撃)
- (4) 攻撃を始めること、攻撃を行うこと、相手の攻撃をかえすこと、また、相手の攻撃を防御することなしに、危険地帯に両足を完全につけて立っていること。
- (5) 立ち姿勢において、相手の袖口を絞って握ること。
- (6) 立ち姿勢において、勝負を避けるために、相手と片手または両手の指を組み合わす姿勢を続けること。
- (7) 故意に、柔道衣を乱すこと、および主審の許可なしに、帯や下穿の紐をほどいたり、締め直したりすること。
- (8) 第6条によることなくして、寝技を始めるために相手を引き込むこと。
- (9) 相手の袖口または、下穿の裾口に指を差し入れたり、相手の袖をねじり絞って持つこと。

### 【参考文献】

- 1) 藤田弘明：大会総評. 柔道, 67(9), 68(12), 1996.
- 2) 藤田弘明：大会総評. 柔道, 68(12), 68(12), 31-32, 1997.
- 3) 神永昭夫：大会総評. 柔道, 3(9), 49~51, 1992.
- 4) 小俣幸嗣他：詳解柔道ルールと審判法. 17, 大修館, 東京, 2001.
- 5) 嘉納行光：年頭に当たって. 柔道, 69,

- (1), 1～6, 1998.
- 6) 中村良三：IJF理事会報告. 柔道, 70(7), 51～55, 1999.
- 7) 中村一成他：'97世界柔道選手権大会の競技分析. 一特に, 反則の面から一, 武道学研究, 6, 25-30, 2000.
- 8) 中村 勇他：1995～1999年世界柔道選手権大会の競技内容分析. 勝利ポイントと勝利獲得技による比較, 武道学研究, 35-1(1), 15-23, 2002.
- 9) 小野沢弘史：アトランタオリンピック柔道競技. 柔道, 67(9), 4-24, 1996.
- 10) 岡田弘隆：世界柔道選手権大会. 柔道, 5～20, 1997.
- 11) 関根清文：第26回オリンピック・アトランタ柔道競技. 近代柔道, 07(9), 64-69, 1996.
- 12) 佐藤宣践：IJF理事会報告. 柔道, 68(12), 82-87, 1997.
- 13) 菅波盛雄：競技分析からみた世界柔道選手権大会の推移. 柔道の視点-21世紀へ向けて-, 道と書院, 130-132, 2000.
- 14) 佐藤温夏：女子柔道の現在と未来. 近代柔道, 294(12), 64-65, 2003.
- 15) 菅波盛雄他：国際大会と国内大会の競技内容の分析. 一嘉納杯と講道館杯の競技内容について-, 武道学研究, 20-2, 201-202, 1987.
- 16) 竹内善徳：IJF審判委員会報告. 柔道, 68(8), 49-51, 1997.
- 17) 高野裕光：国際試合の現状. 柔道の視点-21世紀へ向けて-, 道と書院, 156-162, 2000.
- 18) 高橋 進他：ルールの改定に伴う柔道の技術内容の変化について. 一世界柔道選手権大会を対象として-, 柔道科学研究, 4, 7-13, 1996.
- 19) 竹内善徳：大会観戦記. 柔道, 67(9), 44-46, 1996.
- 20) 竹内善徳：大会観戦記. 柔道, 67(9), 50, 1997.
- 21) 柳沢 久：大会を終えて. 柔道, 63(9), 42-43, 1992.
- 22) 矢野 勝他：柔道衣に関する審判規定改正による競技内容への影響. 武道学研究, 23-2, 25-26, 1990.